

氏名	はらの ようこ 原 野 葉 子
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人博第289号
学位授与の日付	平成17年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	Poetica Pataphysica ——ボリス・ヴィアンにおけるパタフィジック的想像力について——

論文調査委員 (主査) 教授 松島 征 教授 稲垣 直樹 助教授 多賀 茂

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、フランス現代作家ボリス・ヴィアン(1920-1959)のパタフィジック的想像力に注目することによって、奇妙でとらえがたい彼の作品群をつらぬく独自の詩学を解明することにあつた。

第二次世界大戦直後、実存主義の隆盛のさなかに、ヴィアンは深刻な時代性を完全に無視したかのような非現実的な作品を立て続けに発表し、時代の文学的主流の埒外に身を留めることになる。しかし、今日、作家ヴィアンを当時の特殊な歴史的・思想的状況のなかに置きなおしてみると、一見、不真面目な遊戯にも見える彼の創作活動の底にひそむ、独自の文学的戦略の存在が明らかになってくる。そこで、本論文においては、とりわけ後期ヴィアンに決定的な影響を与えたパタフィジック的思想に着目し、実存主義時代における作家ヴィアンの文学的営為を、パタフィジック的な「想像力による解決」の実践という新しい角度からとらえなおすことを目指した。

そのために、まず第1部において、ヴィアンが実存主義時代のスター的存在であったという歴史的コンテクストをふまえて、作家としてのヴィアンが時代の潮流にことさら抗うようにして産み出した〈時期外れ〉のテキストをとりあげ、そこに通底する、パタフィジック的な逸脱の諸相を検討した。

第1章では、処女作『ヴェルコカンとブランクトン』における規範との戯れに着目し、リアリズム批判、管理社会の諷刺という二つの側面に焦点を絞ったテキスト分析を行なった。文学的伝統に対するヴィアンの遊戯的アプローチは、「非リアリズム宣言」という形できわめて明確に打ち出されている。また、管理社会の諷刺には、執筆当時、作者が勤務していた「フランス工業標準化協会」での規格制作体験が、色濃く影を落としている。工業製品の分類・統御・画一化のために〈正常値〉を規定すること、それが技師ヴィアンの業務内容であった。管理社会の象徴とも言える統一規格への反発には、人間を不可視的に拘束する規範のシステム全般に対する、作家の本質的な懐疑が透けて見える。

作家ヴィアンの遊戯的精神は、戦後フランス文化界の一大潮流を形成していた実存主義に対しても適用される。第2章においては、サルトル主宰の実存主義雑誌『現代』に連載された「嘘つき時評」「日々の泡」の二作品を取り上げ、そこで描き出される実存主義の戯画が、未曾有の流行現象となった実存主義に対する相対化の視点の提示を企図していたことを検証した。

第3章では、流行の舞台であるサン＝ジェルマン＝デ＝プレに照明を当て、「実存主義伝説」の生成過程を探るとともに、伝説化に関するヴィアンの批判的言説から、現代社会における代理表象と言語の問題をめぐる彼の問題意識を抽出した。『墓に唾をかける』、『サン＝ジェルマン＝デ＝プレ・マニュアル』、『公民論』はいずれも、アメリカ文学や実存主義哲学を見世物的に取り上げて流行の「商品」と化してしまうメディアに対する批判、及びそうして作り出された華やかな虚像を安易に消費する観客＝大衆への警告を内包した書物である。そこには、現代の高度資本主義社会におけるメディアと記号が抱える諸問題に対する、作家の先鋭的な意識を読み取ることができる。

さらに、第4章では、そうした現代社会の〈状況〉に対する陰画という新たな角度から、奇想小説『心臓抜き』の読解を

行なった。物語内世界において、規範や慣習に縛られて充実した生を見失ってしまった大人たちに対置されるのは、魔法を操る自由な子供たちである。豊かな想像力をはばたかせてあらゆる束縛を逃れてゆく英雄としての子供たちの姿には、自由とは何かという根源的な問題に対する、新たな視座が示唆されていると言える。

次いで、第2部において、ヴィアンとコレージュ・ド・パタフィジックの緊密な関係に視点を移し、パタフィジック的な超越と解放の精神を媒介とする、両者の相互影響を観察した。

第5章では、パタフィジックの理論的素描と、その実践団体であるコレージュの歴史的な位置づけを試みた。アルフレッド・ジャリが提唱した「例外の科学=パタフィジック」の根底にあるのは、世界をゲームとして、万物をシミュラクルとしてとらえるラディカルな視点転換の論理である。そこに賭けられているのは、あらゆる既成の価値体系の崩壊にほかならない。

このようなパタフィジックの精神に共鳴する人々によって、1948年、コレージュ・ド・パタフィジックが設立された。デュシャン、マン・レイなど多くの前衛芸術家を擁するコレージュは、厳密な位階制と独自の暦を持つ閉鎖的な集団であり、機関誌の出版を中心とするユニークな活動を展開してきた、いわば非戦闘的アヴァンギャルドである。

第6章では、ヴィアンとコレージュの緊密な関係を、一次資料を用いて正確に跡付けることに主眼を置いた。1952年、コレージュに参加したヴィアンは、以後、生涯を終えるまでの7年間、運営・寄稿の両面において熱心な活動を続けている。一方、コレージュのほうでも、『屠殺屋入門』を始めとする一連のヴィアン戯曲への積極的評価、機関誌のヴィアン特集号（『書録』12号）の刊行などを通じて、1960年代以降のヴィアン再評価に重要な役割を果たすことになった。

最後に、第7章では、ヴィアンがコレージュに寄せたテキストを取り上げ、そこに見出されるパタフィジック的精神を分析した。『教訓的等式に関する監督官=発行人への書簡』においては、ことわざの固着的な記号表現（signifiant）をひとつの等式と見立て、加減的な変形加工を加えることによって、新たなことわざを無限に増殖させてゆくという数学的操作が開発されている。こうした数学と文学の大胆な結合は、彼の死後、1960年にコレージュから誕生した「ポテンシャル文学工房」（ウリボ）の言語実験と完全に軌を一にする。両者の共通性は、歴史の水面下にとどまり続けたコレージュにおいて、次代の芸術の可能性を醸成する刺激的な磁場が形成されていたことを示唆している。

以上の考察から明らかになったことは、既成の概念にとらわれることなく自由な想像力をはばたかせ、あらゆる拘束の体系から逸脱してゆくというパタフィジック的な創造の原理が、一見脈絡のない多種多様なヴィアンの創作活動をたえず牽引していたという事実である。彼が選択したのは、現実的な社会参加によって世界を変革することではなく、想像力の働きによって世界の自明性を突き崩し、人間の認識を変革することであった。真の自由とは何か、という本質的な問いに対するヴィアンの真剣かつ遊戯的なアプローチは、現代においてもなお有効性を失っていないと言えるだろう。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、「サン=ジェルマン=デ=プレの貴公子」と呼ばれていた作家ボリス・ヴィアンの多岐にわたる活動（詩人・小説家・劇作家・シャンソン作者・音楽評論家・俳優・トランペット奏者など）を、かれの生きていた時代と思想との関連において考察した優秀な論文である。とりわけ、わが国ではほとんど知られていないアヴァンギャルド集団〈コレージュ・ド・パタフィジック〉のもつ現代的な意義を、ボリス・ヴィアンの創作活動との関連性において指摘した意味は大きい。従来のボリス・ヴィアンに関する研究は、評伝的なもの、作家の精神分析、あるいはテーマ論的なテキスト分析が中心であった。これに対して本論文の著者は、テキスト産出の現場に視線をそそぎ、ボリス・ヴィアンの創作活動をその歴史的なコンテキストのなかに的確に位置づけようとした、という点にオリジナリティが見られる。本国のフランスにおいても、作家ボリス・ヴィアンにおけるパタフィジック的想像力の問題を正面から取り上げた研究論文は存在しないという意味でも、本申請論文は貴重な成果であるといえよう。

I 「実存／泡」と題された第1部においては、ボリス・ヴィアンの創作活動とサルトルに代表される実存主義哲学との関係が主たる考察の対象とされる。サルトルやボーヴォワールが主宰する『現代』誌に発表の場をあたえられたヴィアンは、「嘘つき時評」というコラムのなかで、サルトルらの主張する〈参加の文学〉というスローガンに異議を唱えることによって、「実存主義の道化」という役回りを演じた。さらには、わざと不真面目でエキセントリックなテキスト群を世に問うこ

とによって、意図的にスキャンダルを作り出そうとさえした。その代表作が『墓につばをかける』（アメリカの作家 Vernon Sullivan の書いたものというふれ込みの偽名小説）というハード・ボイルド小説である。ボリス・ヴィアンのこのような脱中心的な身振りは何を意味しているのか、その真の狙いはどこにあったのか、という問題をめぐって申請者は考察を展開する。

1950年前後の時代のフランス全体の思想状況において、まるでサルトルの実存主義思想が時代の支配的イデオロギーであったかのようなとらえ方には完全に賛同できないが、いずれにせよ、サルトルの実存主義哲学が当時の若者たちにとってバイブルのような意義をもっていたことは否定できない。ヴィアンは、サルトルのそのようなカリスマ性に異議を申し立て、大まじめなサルトル一味を「嘘つき時評」において揶揄し、カリカチュアライズしたのである。また、『墓につばをかける』という偽名翻訳小説（まるでプチ・パンのように売れた）に関しては、そのパロディとしての性格が浮き彫りにされた。大戦直後のアメリカ崇拜熱に水をかけることによって、ボリス・ヴィアンの反骨精神が遺憾なく発揮されたという意味では、一種の〈反面教師〉の役割を演じた、といえるだろう。実存主義の時代におけるヴィアンの創作活動を扱った第1部が、中枢部の第2部に比較するとやや長いというきらいがあるが、申請者の長期に渡るフランス留学の成果（とりわけボリス・ヴィアン財団における一次資料の検索と収集）がこの部分の叙述に生かされていることを思えば、前半部に力が入っていることはじゅうぶん納得できる。

Ⅱ 従って、「コレージュ／ヴィアン」と題される第2部が本論文の中心的テーマを構成することになる。〈コレージュ・ド・パタフィジック〉という芸術集団は、1948年に設立された、〈パタフィジック〉の実践と普及を目的とする「無益にして学問的な研究団体」である。〈パタフィジック〉とは、奇人作家アルフレッド・ジャリがその著作『フォーストロール博士言行録』において提唱した〈想像力による解決の科学〉、〈例外性を探求する科学〉の謂いである。「コレージュ・ド・パタフィジック」という組織は、〈真実〉と〈虚偽〉、〈主観〉と〈客観〉、〈真面目〉と〈不真面目〉の境界線を取り払うことによって、すべての価値を相対化する。彼らは〈世界の救済〉などという壮大な幻想とはまったく無縁の存在であり、この意味で「コレージュ・ド・パタフィジック」は、これまで歴史に登場した数々のアヴァンギャルド集団とは完全に位相を異にしているのである。ある意味では、彼らの提唱する〈パタフィジック〉が〈超メタフィジック〉であるように、「コレージュ・ド・パタフィジック」を「超アヴァンギャルド集団」と呼ぶべきなのかもしれない。

ボリス・ヴィアンは「コレージュ・ド・パタフィジック」に加入することによって、まるで水を得た魚のように活躍の場を広げるようになる。盟友レーモン・クノーの言を借りるなら「彼以上のパタフィジシャンがいたであろうか？」というほどであった。本論文では、「コレージュ・ド・パタフィジック」という組織が、いかにヴィアンにとって快適な環境であったかが、きわめて具体的に、そして納得のいくように説明されている。39歳の若さで他界したこの鬼才をいちやく正当に評価したのもこのグループであった。

このように本論文は、これまでだれも扱っていない〈ボリス・ヴィアンにおけるパタフィジック的想像力〉の問題に正面から取り組み、具体的な作品分析を試みている。用いられているのは大部分が一次資料であり、例証も豊富である。また論旨も説得力に富んでい、文章は明快で読みやすい。申請者の前途には洋々たるものがあると想像される。なお、第4章における『心臓抜き』のテキストの分析は、学会誌『関西フランス語フランス文学』（第8号）に掲載された論文「ボリス・ヴィアン『心臓抜き』草稿における母親像の変遷について」をもとにして、それに大幅に加筆修正をほどこしたものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、2005年2月16日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。